『ワーキング・ガール』と『プリティ・ウーマン』

井　坂　　聡

2024年の年明け早々から、株価がバブル期を超えたとの報道が連日続いている。そのバブル期に公開された『ワーキング･ガール』(1989年公開）と『プリティ･ウーマン』(1990年公開）という２本のアメリカ映画がある。以下に両作品を簡単に紹介する。

『ワーキング・ガール』の主人公はメラニー・グリフィス演ずる証券会社に勤める女性。彼女は非常に優秀なのだが、学歴が低いため望む職種に就けないでいる。信頼していた女性上司や恋人に裏切られる中で知り合ったハリソン・フォード演じる実力者の協力を得て、最後には仕事の成功と愛を手に入れる。

一方の『プリティ・ウーマン』の主人公はジュリア・ロバーツ演ずるビバリーヒルズの売春婦。その彼女がリチャード・ギア演ずる実業家と一夜を共にし気に入られ一週間の契約を結ぶ。高級ブティックで衣装を購入、テーブルマナーを学んでビジネス会食に同席、オペラ見物などをして過ごす中で次第に「淑女」へと変身し、最後には愛を手に入れる。

どちらもシンデレラストーリーのコメディ映画と評されたが、私はこの２作品を同列に論ずることに無性に腹が立ったことを覚えている。というより『プリティ・ウーマン』が大ヒットしたことに「何だよ、口では女性の自立とか言ってるくせに、結局は白馬の王子を待ってるのが本音じゃないか」とシラけた気分になったのである。

『ワーキング・ガール』の主人公は、確かに男性実力者の協力がなければ成功に漕ぎ着けられなかったが、そこに至るまでの道筋は彼女自身が切り拓いている。「恋愛映画」だから男女の設定になっているだけであって、努力した人間に力を持っている人間が手を貸すことに男も女も関係ない。しかし『プリティ・ウーマン』は、地位も金もある男が無知な「アバズレ」を「一人前の女」に仕立て上げる話で、女性は男性

に庇護される存在以上のものにはなっていない。その差が私の腹立ちの原因である。

ところで、同じくバブル期に流行った、そんな男の「庇護意識」を逆手にとった言葉に「アッシー」「メッシー」「ミツグ君」がある。本稿の読者に説明は不要かと思うが一応解説をしておくと、「アッシー」は送り迎えをさせる（つまり足代わり）、「メッシー」は食事を奢らせる、「ミツグ君」は欲しい物をねだると、自分に群がる男たちを女性が仕分けする用語であり、決して本命の彼氏にはなれない。ちなみに本命の対象は「三高」（高収入・高学歴・高身長）である。

思えば金に狂っていた時代なのだろう。私より少し下の世代になるが、彼女がいるいないに関わらず、取りあえず1年後のクリスマスイブの高級ホテルのスイートルームを大学生の男たちが予約する（そうしないとデートの申し込みすらできない）、女性たちは言い寄る男たちに同じクリスマスプレゼント、例えばティファニーのオープンハートをリクエストして、本命以外からもらったものは質屋に流してしまう（同じものなので、それを付けていれば「あなたから貰ったものよ」と言いくるめられる）などという話が、まことしやかに語られていた。こう書きつらねると何か女性を蔑み貶めているようであるが、そうではなく、当時の女性に対する世間の扱いの説明の前段とご理解いただきたい。

バブル期の始まりは敗戦から41年後にあたる1986年とされている。戦後、様々な女性解放の動きがあったが、それから40年経っても、女性の年齢はクリスマスケーキと一緒、25過ぎれば売れ残りと言われて、早くいい男を見つけて結婚して家庭に入りなさい、という考えがまだまだ主流であった。実際に、ある有名商社では女性は結婚したら退社することが暗黙のルールであったと当事者から聞いている。そんな社会的圧力の中では「一生面倒を見てくれる」安定かつ高収入の仕事を持った男性を見つけることは最重要課題であり、そのために選り好みするのは必然の結果であった。蔑まれるべきは女性でなく社会である。これは当時20代だった自分自身への批判も込めている。

そうした社会を変革すべく、1985年に男女雇用機会均等法が制定され、翌1986年に施行されたはずなのだが。それから約40年後の現在、世の中はどう変わったのだろうか？

バブル崩壊、就職氷河期、プチバブル、リーマンショック、東日本大震災と原発事故、アベノミクスと異次元緩和、時代を語る言葉は色々あるが、ここ30年近く経済的には日本が長い低迷期であったことは間違いない。世の中に余裕がなくなると弱者に目もくれなくなるというのは常であり、そのせいだけでもないが日本の2023年度の

ジェンダーギャップ指数は過去最低の125位（146カ国中）、「教育」「健康」は上位であるにも関わらず、「政治」（138位）「経済」（123位）が大きく足を引っ張っている。そればかりか順位は年々下がっているのである（統計開始の2006年は80位。2023年は2022年の116位から９位ダウン）。Ｇ７ではダントツの最下位、アジアでも韓国（99位）、中国（102位）以下である。

この状況の中で、私は目の前の女子学生に何を語ればいいのだろうかと自問自答の日々である。ディズニーランドが大好きな彼女たちに「ディズニーの世界なんてまやかしだ。ディズニープリンセスに憧れるなんて女性の自立を否定するものだ」などと声高に叫んだところで「ジジイが訳分かんないこと言ってムカつく」とディスられるのが関の山だろう（余談だが『プリティ・ガール』の製作会社はディズニー系列である）。また「お金持ちの男と結婚したい」という学生の言葉は、日々の生活の中で感じる閉塞感に対する切実な思いだと受け止めれば、頭から否定することは全くできない。そして、ここに女子大学の必要性があると考える。一方で「理想」や「建前」が語られる中、授業でもプライベートでも安心して「本音」を語れる女子学生しかいない空間。その本音の中から、理想に向かおうとする気持ちをどれだけ汲み取ることが出来るのか。そしてその思いを代弁して社会に訴えかけていく力があるのかどうか。それが女子大学の存在意義であり存在価値である。

私はよく授業で「自分の人生なのだから自分で進む方向を決められるようになろうね」と口にしている。大学の学びで知識を深めることは、多角的なモノの見方を得ることであり、それによって想定外の事態に出くわしても柔軟に対応する術を身につけられるし、他人にだまされない、利用されないという危機察知能力の獲得にも繋がると説いている。「白馬の王子」を否定するのではなく、「白馬の王子」がいなくても生きて行ける。その道筋を一緒に探るのが、女子大学という場であろう。